ARCLE理事からのメッセージ

シンポジウムを終えて

根岸 雅史（東京外国語大学）

今回の「英語学習に関する継続調査」は、小学校6年生から高校3年生までの7年間を追った調査でした。私自身、調査の構想時からかかわっていただけに、このような形でまとまり感慨深いものがありました。この調査の特徴は、英語教育にかかわる様々な実態に生徒の目線から迫っていることです。

最も興味深かったのは、授業での「話す」「書く」活動の有無が、英語学習意欲・英語を使う意欲につながっていたことでした。これまでは、「話す」「書く」活動の有無の是非だけが論じられてきましたが、今回の調査結果からは、「話す」「書く」活動が語学習意欲・英語を使う意欲につながり、さらには、それが将来の言語使用のイメージにまでつながっていることが分かりました。この点に関しては、まだまだ深掘りが必要なトピックかもしれませんし、これこそが調べてみなければ気づかなかった視点かもしれません。

また1つ、英語教育研究の面白さに気づかされたシンポジウムとなりました。

アレン玉井 光江（青山学院大学）

今回のシンポジウムでは「英語学習に関する継続調査」の結果が報告された。結果として、学年が上がるほど英語が「好き・得意」が減少し、「嫌い・苦手」が増え、高3では「嫌い・苦手」の割合の方が高くなっていた。学習内容が難しくなるにつれ英語が苦手になり、嫌いになっていくのであろう。ただ、6割強の高3生は「これからも英語を頑張って勉強したい」と思い、また「高校までの授業で英語を使う力を高められた」と評価していた。問題は、同じく6割の生徒が「英語を使う力を高める学習方法がわからない」と回答していたことだと思う。英語を使う体験をし、その力を獲得したと実感し、続けて勉強したいと願っていても、その方法が分からない。生涯学習の重要性が指摘される昨今、効果的なIT教材の開発・使用なども含め、lifelong learningとして学校における英語教育の基本的なスタンスを考える時期が来ているのではないかと感じた。

金森 強（文教大学）

一年の終わりにいろいろなことを考える機会を与えてくれるシンポジウムでした。「やっぱり、今年も参加できてよかった!」という思いです。企画・運営にかかわった皆様、ご参加いただいた方々に心より感謝いたします。多くの点について新たな視点を得ることができたシンポジウムでしたが、特に、エビデンスに基づいた課題の解決でなければ民間療法レベルの対応で終わりかねないということ、長い時間をかけて丁寧にデータ収集をし、得られたデータを冷静に分析する作業を通してこそ真実が見えてくるということの再確認ができました。数字やグラフとして表されるとはっきりと見えてくることが多く、理解を助けてくれます。自分が行うべきことや考えるべきことが分かり、大変ありがたく、地道な調査・研究を積み重ねること以外に真実に近づく道はないと、強く感じた次第です。数字やグラフに弱点があるとすれば、個々の属性や経験等が特定のラベルの下にくくられて見えなくなってしまう場合があることです。様々な現場で起こっている事実と照らし合わせて考えてみると、うまく表されていない部分があることに気づくかもしれません。現場から得られる知見、調査・研究から見えてくるエビデンスの両方を吟味し、目の前の学習者にとって最も望ましいこと、なすべきことは何かを見極めることが大切であり、指導にあたる教師は、多角的視点から冷静に捉え、判断をし、自身の教育活動に活かす工夫をすることが重要となりそうです。

和泉 伸一（上智大学）

今回のシンポジウムでは、とりわけ、児童・生徒の意欲を喚起するための言語活動の有用性が生徒目線から示されたこと、同時に、学習方法を教え鍛えるためのストラテジー指導の必要性とあり方について話が深められたことが重要だったと感じました。言葉の学びは授業内だけでは完結せず、教室外でも継続されていくべきことです。それは生涯学習ともいえるべく、一生を通じた自己成長の過程でもあります。だからこそ、自律した学習者の育成が注目されるのでしょう。これからの教師は、知識を伝授してそれを訓練するだけでなく、児童生徒が教室外でのコミュニケーションを通じて言葉の学びをいかに広げ、深め続けていけるかを導き、促す、「学習のコーチ」としての役割が生じてくるでしょう。As an ancient proverb says, “Give a man a fish, and you can feed him for a day. Teach a man how to fish, and you feed him for a lifetime.” 英語教育界でも、この言葉がより一層重みをもつ時代になってきたようです。

酒井 英樹（信州大学）

英語教育はどう変わったのか、またどう変わるべきなのかについて事実に基づいて議論できたシンポジウムであったと思います。小学校6年生から高校3年生までの7年間にわたって実施した「英語学習に関する継続調査」の報告に基づいて、話すことや書くことの言語活動は、経時的には減っているものの、過去の調査に比べて増えていることが報告されました。確かに英語の授業は変わってきているといえます。また、言語活動の経験の有無と生徒の意識や態度には関係があることも示されました。言語習得の面だけでなく、意識面や態度面における言語活動の重要性を改めて考える機会となりました。一方で、言語活動の経験の有無にかかわらず、高校卒業時になっても英語の学習方法が分からないと答える生徒が多くいました。言語活動を通してどのように言葉を学ばせていくのか、また自ら学ぶ学習者をどのように育成していくのかは、今後の課題であるといえます。

長沼 君主（東海大学）

新課程で育成すべき3つの資質・能力の柱のうち、「学びに向かう力」は「主体的に学習に取り組む態度」として評価されるが、「自律的」ではなく「自立的」な学習の取り組みとなると話は異なってくる。高校卒業時に期待される力は、CEFRでいうB1レベルに相当するが、「自立的な使用者（independent user）」となる閾値（threshold）のレベルとされている。自律的な学習者（autonomous learner）として、自立的に使えるようになる過程のA2（waystage）レベルでも、使用者としての自分をイメージし、取り組みの改善において自己調整を行いながら方略を駆使し、粘り強く取り組み続ける姿が評価される。自己調整は学習後に振り返りをして次の学習へとつなげることを意味するだけでなく、学習のプロセスの「予見」「遂行統制」「省察」のすべての段階で起こる。課題の見通しを立てる際に「できる（自己効力）感」を感じ、学習途中で自己の達成状況をモニタリングし、より高い達成に向けて自己実現を図る。学習者と教師がともに学びに責任をもち、使用及び学習のための方略を批判的かつ共感的に共有・吟味し、課題に合わせて最適化を行う時間を授業の一部として確保したい。

工藤 洋路（玉川大学）

今回のシンポジウムでは、同じ学習者を小学6年生から高校3年生まで7年間追った調査の結果が報告されました。分析結果として、「英語を使う力を高める学習方法がわからない」と回答した高校3年生が一定以上いることが分かりました。この結果から先生の役割として、英語を教えることだけではなく、学習方法を身につけさせることも大切であることを改めて認識できました。これを受けて、生徒が学習方法を考えることを組み込んだ指導を津久井先生に実践していただきました。実践研究からは、次の課題に向けた学習方法を生徒に考えさせることで、その課題をより効果的に実践できるという示唆が得られました。類似したタスクを繰り返しながら、次への見通しを、先生のサポートを通して生徒が考えることで、英語力と英語学習力の両方の育成が期待できます。今回のシンポジウムを通して、英語学習力をいかに伸ばしていくかという今後の英語教育の1つの課題を見いだすことができたと思います。

参加者の声

「心に残った気づきや学び・これから取り組みたいこと」

～参加者アンケートから～

小学校教師

◎学習者の自律性の育成に、学校教育がいかに大きな影響を与えているかを痛感した。グローバル化が進み、求められている英語力も変化していることを、まずは指導者が認識し、意識を変えていく必要があると思う。教えられた方法でしか指導できないことは論外であり、今、これからを生きる児童生徒にとって必要な力とは何かを常に考えて、指導にあたっていきたいと思った。

◎振り返りを毎時間する必要性に悩んでいたのですが、初期には、目標を立てたり、達成するための工夫を考えたりすること、中期には、その目標を具体的にすることと、具体的な振り返りの目的が分かりました。このことを踏まえて、子どもたちの振り返りを指導していこうと思います。

◎言語活動を通した学びは、子どもの学習意欲を高めることに効果的といえそうだが、学習方略、学び方の自覚化を促すには、工夫や手立てが必要そうであること。

中学校教師・中高一貫校教師

◎形成的評価が大切だとは分かっていても、一人ひとりと向き合って一緒にじっくり学んでいくという姿勢を忘れかけていた気がします。大変学びの多い時間でした。ありがとうございました。

◎タスクの丸投げではなく、教育的介入やリトライする機会が重要であるということ。

◎リフレクションで、生徒の学びが深まるのだということを改めて感じました。フィンランドのように、1日かけてリフレクションはできないかもしれませんが、毎日積み重ねることで、生徒の力を伸ばしていきたいと思います。

◎生徒の学びを発展させるために、教師がどのような介入ができるかの多様性が広がっているということです。ただ、大事なのはやったり、やらなかったりすることではなく、ゴールのイメージをもって継続することだと感じました。

高校教師

◎「アウトプットすることによって、インプットする余地が広がる」という趣旨の和泉先生の発言を聞き、改めて、「言語学習」には「気づき」が大切だと感じました。

◎振り返りの観点の提示を明確にし、生徒自身が自分で改善点を見いだしていけるようにする。

◎生徒自身が、英語を使う力をつけたいのに、そのための学習方法が分からないと自覚していることに驚いたし、私自身も悩んでいたことだから、どのようにすればよいのか、他の先生方の意見や考えを聞けてよかった。

◎日々の授業の中にもっと英語を使う経験の機会を設け、使える楽しさを実感させるとともに、生徒の英語力が向上するには何が必要か適切なフィードバックを与える。

◎英語学習は生涯学習である。どのように学校教育に落とし込んでいくのかが大切。そのためには、教師として自己研さんに励まなければならないということ。

学生

◎失敗も含めた経験が、生徒自身の学習意欲向上につながることもあるということ。また、教師がモデルとして生徒に言語使用の方向性を見せつつも、生徒とともに成長していく存在であるべきということ。

◎生徒に「気づかせる」工夫を考えていく際のキーワードと、それらがどのような内容なのかの概略を教えていただいたので、今後どんな方向性で自分自身が教師として学んでいくとよいのかが明らかになりました。ありがとうございました。

民間企業

◎与えるだけで終わらない。reflectionさせる。生涯学習量が増えていて学校教育だけで担保できない。自律した学習者に育て上げていき、教師がいなくても一生学習を続けていけるように、意欲が続くような知的な楽しみや喜びの経験をさせてあげること。

◎言語活動が子どもの英語学習への意欲につながっていることは明らかだが、自律的学習者を育てるには、ただ言語活動を組み込めばよいわけではない。学校生活だけではない生徒の将来まで見据えて、日々の授業を計画していく必要があること。自律的に学習を継続できるように育てていくこと。